



鳥 27 (4) 1978 年より転載

4 代会頭 黒田長禮 KURODA Nagamichi

1889 (明治 22) – 1976 (昭和 51). 会頭在任期間 1947 – 63

唐沢孝一 (都市鳥研究会)

1889 (明治 22) 年、東京市赤坂区 (現・港区赤坂) に生まれる。中西 (1988) によれば黒田は「福岡藩 55 万石の大大名の藩主の嫡男」であり、「黒田家は、長禮から数えて 4 代前の斉清から長博、長和、長成といずれもきこえた鳥類研究者」である。広大な屋敷と鴨場 (後には羽田鴨場) のある環境で育ち、生まれながらにして鳥学研究の環境に恵まれ、19 歳にして『羽田鴨場之記』(1908) を出版している。学会が発足した 1912 年に東京帝国大学理学部動物学科に入学。飯島教授の元で鳥学会創設発起人の一人、かつ評議員に名を連ねる。大学時代に『世界の鴨』(1912) を出版、大学院 2 年の 1917 年 4~5 月に朝鮮半島に採集旅行に出かけ釜山港の剥製店で見知らぬ鴨に出会う。後に新種カムリツクシガモ発見につながるのだが、詳しい経緯については柿澤 (1991) を参照されたい。

動物学科の飯島教授は、学生である黒田に分類学、鷹司に飼育学、内田に応用鳥学 (保全) の研究テーマを与えた。黒田は分類学の研究に邁進する。『六郷川口に於ける鷓・千鳥類の渡り』(1919)、『鷓・千鳥図解』(1919) を次々に出版。1924 年、「琉球列島の鳥相に関する研究」で学位を取得。鳥類学の学位はこれが日本初となる。

黒田の研究は、「旧日本領土の鳥類の分類学的研究」「標本の分類学的査定」であり (森岡 1978)、4 種の新種を発見し亜種の記載は多数にのぼる。ただし、現在でも種として扱われているのはカムリツクシガモとミヤコショウビンの 2 種と少ない。それは黒田等が研究する以前の 19 世紀~20 世紀初頭に日本の鳥の調査は外国人によってほぼ終えていたためである。黒田自身、今後の研究は新種発見のみならず、「各種類の習性や地理的分布の重要性」を指摘している (黒田 1927)。

黒田はブックメーカーと言われるほど著書や論文は多い。その膨大なリストは会頭還暦を祝う「鳥」特集号に 43 ページにわたって掲載されてい

る (蜂須賀 1949)。膨大な業績の中から中西 (1978) は『日本鳥類目録』『鳥類原色大図鑑』『雁と鴨』の名著に注目。山階 (1978) は『世界のオウムとインコ』『世界のオウムとインコ図鑑』『世界のウズラとシャコ』の 3 冊を取り上げ「後の人々に恩恵をあたえた」と評している。

黒田は 1921 年に宮内庁主猟官、式部官を務める。1939 年、父の死により黒田家の家督を相続し侯爵、貴族院議員となる。戦後は猟政調査室長などに就任した。

黒田の分類学の業績は、鳥類のみならず魚類、哺乳類にも及ぶ。哺乳類で黒田により命名されたのは 65 種 (現在でも独立種として認められているものは 4 種) である (古賀 1978)。1923 年には日本哺乳類学会発起人の一人となり、戦後間もない 1947 年に日本鳥学会会頭と日本生物地理学会会長に同時に就任。1949 年には日本哺乳類学会会頭となる。

一方、鳥学会への黒田の貢献は実に大きく、森岡 (1978) は「学問的にはもちろん、経済的にも戦前・戦中・戦後を通じて本会が黒田博士に負うところは決して少なくなかった。もし黒田博士の援助がなかったならば、日本鳥学会はずっと以前に消滅していたかもしれない」と記している。戦時中休刊していた「鳥」の復刊にも尽力した。

黒田の人柄について中西 (1988) は「黒田さんは一升の酒を召し上がっても、平然として顔色も平生のごとく、およそ無駄話をするなどのこともなく独り肅然として盃を重ねておられるだけの無言の長者」「数多い会合に同席しても極めて口数の少ないお人」と記している。「デラクール賞」の名で知られるデラクール (1978) は弔文の中で、同世代でもあった黒田との親交や日本滞在中の和食や鴨場での思い出に触れつつ「he was the first modern scientist from Asia」と評し、アジアの動物相解明への業績を称えた。